

生駒市緑の基本計画改定懇話会 第2回分科会 議事要旨(案)

1. 日 時

令和7年8月8日(木)13時30分～14時30分

2. 場 所

生駒市コミュニティセンター404会議室

3. 出席者

【参加者】公園プレイスメイキング分科会:田村康一郎・伊藤智子・福井美樹・福田佳明
自然との共生分科会:松本光朗・磯貝猛・辻野勝久・町矢真美・森田広幸・井上良作
【事務局】建設部みどり公園課 米田部長・巽課長・高橋課長補佐・深瀬
(株)ヘッズ 田中・稲熊・岡本(慎太郎)

4. 傍聴者

なし

5. 議事要旨

(1)開会

(2)緑の基本計画の改定について

- ・第1回分科会の振り返りを行い、事務局から緑の基本計画の改定の視点、計画の基本方針、計画の推進方策について説明を行った

(3)質疑・意見交換

- ・分科会ごとにわかれ、緑の基本計画の推進体制について、質疑・意見交換を行った。

① 公園プレイスメイキング分科会

■実装とはどのような状態か

- ・企画・実践から実装に向かうというよりも、企画と実践を繰り返し、リニューアルしながら続いていくものではないか。
- ・特に子育て世代は、公園の活用に関心があった人も、2年経つと子どもが成長し、関心事が変わって興味がなくなる。人の気持ちや事情は変わり、これまで活動された人が活動から離れていくこともあるため、継続的に取組が行われている状態を目指すならば、緑に関心がある人を集め、(その人たちの関心ごとに沿うなど柔軟性を持って)主体的に取り組む顔ぶれの新陳代謝をはかる機会が必要である。
- ・活動を継続するにも、若い人が忙しくて入ってもらえない、自治会も高齢化が進んでいるという状況が実情である。

■「企画・実験」を「実装」するには、どのようなことが必要か

- ・昔は経済活動として日常的に緑の手入れがされていたものを、今のボランティア活動の延長でやっていくということは、無理な話である。「緑の中で楽しむ」ことからスタートし、そこから「緑への関心づくり」につながっていくのではないか。そのためには、日常の憩いの中で、楽に快適に緑を楽しめる環境整備が必要である。

- ・みんな時間とお金がないので、一見緑とは関係がない消費活動の楽しみが、実は緑を守ることにつながっているということになれば、市民が緑に関わる可能性も増えるのではないかな。直接緑に関わるだけではない色々な入口が必要である。
- ・楽しみだけでなく、今の経済的なメリット、地域通貨のような利益を生み出す旨味があり、そのために緑を使うという発想も必要ではないかな。
- ・若い人や民間事業者等が、やりたいと思った事を自治会に相談すると駄目になることがある。そうならないためには、彼らと自治会の間に入ってくれる人や、自治会ではなく行政に相談できるルートが必要である。
- ・活動場所を探している人や、若者や民間に入ってきて欲しい自治体もあり、場所や人等の情報を得られる場が必要である。
- ・この分科会のような様々な人が集まれる場があると、自分では気づかなかった活動場所や、それまであまり話す機会のなかった人の情報を得ることができ、新たな活動にもつながるのではないかな。
- ・市民の力だけでは限界があり、たとえば、緑が感じられるカフェや美術館など気軽に緑の中で楽しめる環境整備や、マイファームのような小規模な農園運営といったイメージで、緑を活用した事業を実施できる民間事業者の誘致が望まれる。

② 自然との共生分科会

■実装とはどのような状態か

- ・「企画」「実験」「実装」という言葉に違和感がある。行政的な言葉遣いが現場の感覚とちがう。
- ・行政的な実装や目的ありきではなく、市民の自発的な活動、市民の発意から始まることが重要。やらされている感があるといけない。
- ・人(活動)によって実装がどういう状況かは異なるし、実装されたら次の実験が始まったりする。
- ・スタートは自分が「やってみたいこと」「良いと思うこと」から始まり、さらに「ここまでできたら生駒市のためになりそう」というところが実装かもしれない。「社会に役立つ」ということ。
- ・たとえば、最初は里山を守りたいというモチベーションから始まり、そこに利用する視点(マウンテンバイクなど)が加わることで色々な人が関わるようになる、そうすることで里山を守り育てることに繋がる、この状態も実装かもしれない。
- ・山や木々のメンテナンスだけを主目的とするのではなく、使うこと、楽しむこと、遊ぶこと、が目的になりそのための場所づくりとして手入れが必要、という方がモチベーションに繋がるし、参加のきっかけになる人は多いのではないかな。

■「企画・実験」を「実装」するには、どのようなことが必要か

- ・市民の自発的な活動が重要であり、行政側からアプローチするのではなく、市民側から提案や相談があったときに、それを受けて行政がバックアップ的に支援してもらえるとありがたい。
- ・行政は、市民から提案できるきっかけづくりと、それまで「待つ」ことが大事。
- ・自分で悩む時期も大事。悩むことで誰かに助けを求めて繋がれたりすることもある。
- ・活動のモチベーションとして、山などの自然環境の整備自体を目的に整備するのではなく、何か他の、関心のある「○○」のための整備、この「○○」に気づくスイッチが大事。
- ・様々な人が集まる場、プラットフォームがあるとよい。出会う機会はみんな欲しい。

イメージ:

- ・例えばお花が好きな人、里山や竹林での活動(保全、活用)をしているなど、興味があるテーマに沿って、普段会う機会がない人と出会える・交流できる機会。

- ・いろいろな集まりをぼこぼこやっていくうちに知り合ったり、違うことに興味がある人と結びついたり、そういう交流ができればよい。
- ・行政としてはそれを把握しておいて引き出しを持っていれば、やりたいなという人が出てきた時にサポート(マッチング)できる。
- ・(緑に関連して)何かやりたいと思っている人が、行政(など立場や所属が異なる人)に対して相談・提案できる機会。
- ・マッチングや定期的な会議の場、広報などは、個人や自分たちの団体だけだと限界を感じることも多いため、行政等によるバックアップが大事。
- ・地域の理解を得ることはとても大事。地域コミュニティとの間に行政が入ってくると安心感・信頼感がある。地域外の人が直接地域に入るとうまくいかないケースもある。

(4)その他

- ・参加者を募集し「企画・実験」にあたるプロジェクトを実施している「みど活！いこま」のパンフレットを配布し、開催状況と参加者による企画発表を行う12月14日の案内を行った。

6. 閉会

以上